



JIC インフォメーション

第 198 号 2018 年 10 月 10 日

年 4 回 1・4・7・10 月の 10 日発行

1 部 500 円

発行所: JIC 国際親善交流センター 発行責任者: 伏田昌義

<http://www.jic-web.co.jp>

東京オフィス: 〒160-0004 東京都新宿区四谷 2-14-8 YPC ビル 7F TEL: 03-3355-7294 jictokyo@jic-web.co.jp

大阪・ロシア留学デスク: 〒540-0032 大阪市中央区谷町 2-7-4 谷町スリースリースビル 7F TEL: 06-6944-2341

はりねずみのジェーニャ



ロシア・旧ソ連 国際交流誌

2018 年『ロシア年』『日本年』



ロシアにおける日本年
日本におけるロシア年 2018
год росии в японии
год японии в росии 2018



モスクワでの J-FEST Summer 2018



「悪魔の飽食」合唱団バルト公演



シベリア出兵 100 年、墓参と交流の旅

J-FEST Summer 2018

日本の夏祭り、モスクワで大盛況・・・加瀬由希子・・・ 2P

【イベント案内】ロシア映画祭/JIC ロシアセミナー・・・ 4P

【本の紹介】ロシア語だけの青春（黒田龍之助著）

・・・松下則子（神戸市外大非常勤講師）・・・ 5P

「悪魔の飽食」合唱団バルト三国公演ツアー・・・ 6P

シベリア出兵 100 年 墓参と交流の旅・・・ 7P

アムール州の日本人捕虜とイワノフカ村

・・・富田 武（シベリア抑留研究会代表世話人）・・・ 7P

【留学記】公園の町ミンスク・・・ 鎌田幸伸・・・ 11P

【旅行記】ソロベツキー諸島への旅（最終回）

・・・モロゾフ・デニス・・・ 13P

2018 年ワールドカップのロシア・・・ 14P

キルギス日本語教師募集・・・ 16P

JIC では、Jクラブ(JIC 友の会)会員を募集しています。
年 4 回の情報満載のインフォメーションをお届けします。

モスクワのど真ん中で日本の夏祭りが盛大に行われていることをご存知だろうか？ J-FEST Summer 2018（日本の夏祭）は今年 8 月 4 日と 5 日にゴーリキー公園で開催され、来場者は 10 万人を記録した。以下は、J-FEST 事務局代表の加瀬由希子さんからいただいたレポート。（編集部）

J-FEST Summer 2018

日本の夏祭り モスクワで大盛況



加瀬由希子（『J-FEST』事務局代表）

モスクワの中心部にあるゴーリキー公園で、日本の夏祭りをコンセプトにしたジャパンフェスティバル、『J-FEST Summer』を開催しております。主催は、J-FEST 実行委員会（在ロシア日本大使館、ANO「J-FEST」、博報堂ロシア、Japan Art Rainbow LLC の四者体制）です。

私の役割は、事務局 ANO J-FEST の運営、また企画・実行チーム（Japan Art Rainbow LLC）としてイベントの中身を作っております。夏祭りは、国際ショディエフ基金をはじめとする団体様、企業様のご支援と、「ガレージ」現代美術館とゴーリキー公園のご協力で、昨年の夏から一般市民向けに入場料無料で実現しているものですが、おかげさまで今年は、8 月 4 日（土）、5 日（日）の両日に開催、二日間延べ 10 万人を超える市民の方にお越しいただき、多くの方に喜んでいただくことができました。

2018 年は、「ロシアにおける日本年」にあたり、ロシア全土で日本のさまざまなイベントが行われており、なかでも『J-FEST Summer』は、松竹歌舞伎、流鏝馬、プーシキン美術館の『江戸絵画展』とともに、日本年の注目すべき 4 大プログラムとして大きく取り上げられ、実行委員会として無事故で安全に実施できるよう、緊張して 1 年がかりで準備にあたっていました。

開始は 2009 年、大使館主催のフェスティバル

このイベントがどのようにして誕生したかと言いますと、はじめは、『ジャパン・ポップカルチャー・フェスティバル』という名前で 2009 年に日本大使館が、入場無料で実施したことにさかのぼります。モスクワ市内の 500 人収容の映画館会場で、1 日のみの開催で、当時の新作人気映画『エヴァンゲリオン新劇場版：破』の上映や、「かわいい大使」でありロリータファッションのカリスマ的存在である青木美沙子さんを招聘しての原宿ファッションショーがあり、さらには当時外務省との

連携で海外へ精力的にサブカルチャーの紹介をなさっていたコンテンツ・プロデューサーの櫻井孝昌さん（故人）の講演が行われました。これらのクールジャパンのコンテンツを求め市内の若者たちが長い行列を作って来場、会場はぱんぱんでごった返していました。翌 2010 年から弊社 Japan Art Rainbow LLC が運営のお手伝いをさせていただくことになり、また若者向けファッションに関心のあった伊藤忠など日本企業数社にも参加していただき、官民一体のイベントとなっていました。このときから若干の入場料を設定したのですが、やはり大盛況で 3000 人以上の来場者がありました。また、このときからブース参加も募るようになりました。

ジャパンポップカルチャーの広がり

「ジャパンポップカルチャー」という言葉は、個性がありますので、非常に魅力的で面白い内容を含んでいるのですが、他方でイベントの内容や来場者を限定していく部分があります。サブカルチャーに関心のある方でない、なかなか入りにくい感じを与えてしまう面があります。日本の文化全体に大きな関心を持っているロシアの潜在性を考え、また若者のエネルギーと柔軟性を信じ、より幅広い層の来場者を想定して、よりパワフルな文化フェスティバルにできないかと考えました。若者に対しては新しいものを提供し、ある種のショックを与えるようにできないかとも考えました。大きなプラットフォームを用意し、その上で多種多様な日本のコンテンツを紹介、それらが交差し全体が楽しくにぎわうようにするために、『J-FEST』という名前に改名、そして現在に至ります。

ここでは、日本「J」というブランドのもと、あらゆるものが参加できます。伝統も現代も、そして、音楽、ファッション、料理、サブカルチャー、アート、ゲーム、建築、日本製品などなど。

ステージプログラムとして『J-FEST』は、たくさん

の方に支えていただき、いろいろなことを実施してまいりました。ノイズ音楽、現代美術、舞踏パフォーマンス、声優のコンサート、ファッションショー、スタイリストショー、全国コスプレ大会などの参加型プログラム、新作映画上映（『るろうに剣心』など人気映画で DVD の発売されていない新作をたくさん上映）、武道デモンストレーション、大衆演劇、ストリートダンス等々、また、AKB48 まで来ていただきました。

こうした取り組みの中で、わざわざ遠い地方から足を運んで、ファンになってくださっている来場者の方々もいらっちゃって、「今日は自分の人生の中で一番幸せな日でした。ありがとうございます!」、「こんなものが日本にあったなんて驚きです。ショックを受けました」など暖かい言葉を寄せていただきました。

屋内で行っていた J-FEST は、2012 年には二日間で延べ 2 万人ほどのお客様を動員するまでに成長し、ロシア国内で行われる日本イベントで最大のものになりました。



J-FEST Summer 2018
の一コマ。
浴衣姿の女の子たちも
人気の的。

開催 2 年目にして来場者 10 万人！

昨年から関係者と相談し、夏祭りを J-FEST として入場無料で実施することになりました。公園を散策している一般市民の方々も気軽に訪れることができます。大きな櫓を組み、日本から提灯を 800 個ぐらい輸入し、飾り付け、屋台風のブースを設営するなど、日本のお祭りの雰囲気を経験一杯再現しています。

さて、盆踊りをロシアでどのように定着させていくかという課題があります。以前にアルゼンチンで 20 年ほど前から続いている大型の盆踊り大会があり、非常な盛り上がりを見せていることを動画で見たことがあるのですが、ロシアの人たちは親日派も多く、またラテン系のノリもあることから、アルゼンチンに負けないエネルギーな盆踊り大会になるのではないかと期待もありました。そして結果は、期待通り、開催 2 年目に

してすでに来場者は 10 万人を超え、多くのロシア人の方々が気軽に踊りに参加し、楽しんでくださっています。今年は、1 日 4 回の盆踊りを二日行いましたので、計 8 回になります。『炭坑節』、『東京音頭』、『河内おとこ節』などの古典曲から、『ジンギスカン』、『ダンシングヒーロー』など日本の盆踊りでの人気曲などさまざまな盆踊りをやりました。なかでも一番盛り上がったのは、『ダンシングヒーロー』だったのではないかと思います。小さなお子さんから若者、年配の方まで笑顔で踊っていらっしゃいます。

なお、今年は高円寺の阿波踊り団体『菊水連』さんから 30 名来てくださって公園の並木道で流し踊りをしたり、九州から和太鼓チーム『野武士』さんが来られてコンサートを行ったりと、盛りだくさんのプログラムでした。公園の噴水広場では、J-POP やアニソン、和楽器の音楽を流したのですが、これは大変画期的でした。公園のマニュアル音楽ではない曲で噴水が踊ったのは公園の歴史上初めてだったのです。

ほかにも、日本食の屋台コーナーやハンドメイドのグッズ販売コーナー、ショップ、企業ブースなどで賑わいました。プーシキン美術館のキュレーターの方などのレクチャー、日本映画の上映、親子で参加できる様々なワークショップ、武道のデモンストレーションなど、午前 11 時ぐらいから夜の 11 時まで、二日間賑わいました。その様子は、ロシア国営放送をはじめ多くのメディアに大きく取り上げていただきました。嬉しいことに外国から遊びに来られた日本ファンの来場者もいらっしゃいました。また、コスプレ大会をやらなかったにも関わらず、コスプレの子達もたくさん遊びにきてくれました。私自身は、関係者として、少しでもお祭りの雰囲気を作ることに貢献しようと浴衣を着用していましたが、会場を歩いていたとき、ロシア人の中学生ぐらいの女の子が近づいてきて、「あなたのコスプレ、いいですね」と声をかけられました。世代によって、お祭りから受ける印象も変わるんだなと大変興味を惹かれました。

北国のロシアは、夏の季節は日が暮れるのがとても遅いのですが、8 月の初めようやく暗くなる 20 時半ごろには日本から持ち込んだ提灯も生きてきます。紅白のやわらかい灯りが、モスクワでは幻想的な雰囲気さえ演出します。日本に対する憧れをもっているロシア人が多いのに対して、モスクワには日本人がとっても少ないのが残念です。機会がありましたら、ぜひ浴衣をご持参の上、モスクワの J-FEST Summer へ遊びにきてください。そして踊りにご参加いただけたら、関係者一同とても嬉しく思います。きっと、ロシアと日本との交流に関する新しい発見をしていただけるのではないかと思います。（『J-FEST』事務局代表、プロデューサー）

《2018年日本におけるロシア年》



今年 2018 年は「日本におけるロシア年」「ロシアにおける日本年」です。J-FEST Summer をはじめ、モスクワやペテルブルグ、ウラジオストク、サハリンなどロシア各地で日本領事館や日本センターが中心となって「日本年」の文化イベントが開催されていますが、日本国内でもロシア文化フェスティバル日本組織委員会などによってコンサートや絵画展、映画祭など「ロシア年」の多彩な取り組みが進められています。

また、この 10 月にはサンクトペテルブルグ市代表団が大阪を訪問、モスクワ市代表団が東京を訪問してそれぞれ日本との交流拡大にむけたプレゼンテーションを行うなど、ロシア側の取り組みも活発化しています。

わが JIC でも「日本におけるロシア年」協賛イベントを以下の通り 10 月、11 月に行いますので、皆さん是非ご参加ください。

第2回ロシア映画祭in東京

10 月 19 日 18:30 開場; 渋谷・ユーロライブ
「底のないバッグ」(Мешок без дна)
監督ハムダモフ・ルスラム/2017 年/104 分/ドラマ

10 月 20 日 18:30 開場; 渋谷・ユーロライブ
「不思議な少女ドミナ」(Доминика)
監督アゲイチエフ・オレグ/2018 年/80 分/コメディ、ファンタジー

10 月 21 日 18:30 開場; 渋谷・ユーロライブ
「ピオニールの名の下に！少年たちの最後の夏」
監督カルピロフスキー・アレクサンダー/2017 年/98 分/コメディ、冒険、ファミリー

10 月 22 日 18:30 開場; 麹町・カスケードホール
「短波放送」(Короткие волны)
監督ドブジェンコ・ミハイル/2017 年/80 分/ドラマ、コメディ

10 月 23 日 18:30 開場; 在日ロシア大使館・コンサートホール
「田舎の純情物語」(Жили-были)
監督パーリ・エドアルド/2017 年/85 分/コメディ
「302 ビス」(302БИС)
監督ミシュキン・アンドレイ/2017 年/17 分/英語字幕

10 月 24 日 18:30 開場; 渋谷・ユーロライブ
「グッピー」(Гупёшка)
監督フルマン・ブラッド/2017 年/79 分/ドラマ

10 月 25 日 18:30 開場; 麹町・カスケードホール
「天才バレエダンサーの皮肉な運命」(После Тебя)
監督マティソン・アンナ/2016 年/79 分/ドラマ

映画祭はロシア文化省の事業として行われます。ロシアから映画監督、俳優ら 10 名の代表団が来日し、ロシアの最新映画を紹介します。各映画の上映後に監督らによるスピーチと参加者とのトークを予定しています。

参加費は無料ですが、事前予約が必要です。

申込先; 詳細は JIC のホームページをご覧ください。ホームページの「イベント情報」から簡単に申込みができます。

⇒ www.jic-web.co.jp

または E-mail でお申し込みください ⇒ jictokyo@jic-web.co.jp

主催; ロシア映画祭実行委員会

協力; 一般社団法人ユーラシア国際映画祭、JIC 国際親善交流センター、在日ロシア連邦大使館

《JICロシアセミナー》

講師: 黒田龍之助先生

テーマ; もう一つの『ロシア語だけの青春』

黒田先生が、高校 3 年生から 10 年間以上ここで学び、のちにロシア語を教えることになった母校、ミール・ロシア語研究所の思い出を綴った「ロシア語だけの青春～ミールに通った日々」(現代書館)が、ロシア語研究者・学習者の間で話題を呼んでいます。「ミール方式のロシア語学習法」についてはもちろん、黒田先生がわが JIC の通訳だった学生・院生時代の思い出も交えて、「ロシア語だけの青春」だったころのお話をさせていただきます。

日時; 11 月 17 日(土) 13:30～17:00

会場; 弘済会館(地下鉄「四ツ谷」「麹町」歩 5 分)

講師; 黒田龍之助・神田外語大学特任教授

テーマ; 「もう一つのロシア語だけの青春」

第 1 部: 13:30～15:00 講演会

第 2 部: 15:15～17:00 ロシア語留学説明相談会

参加費; 無料(要事前予約)

申込先; JIC 国際親善交流センター

E-mail jictokyo@jic-web.co.jp

TEL; 03-3355-7294 FAX; 03-3355-7290

2018 年ロシア文化フェスティバル

2006 年から始まったロシア文化フェスティバル in Japan は年々プログラムを充実させてきました。今年も 6 月 12 日のオープニングコンサート(ミハイル・プレトニョフ指揮 ロシア・ナショナル管弦楽団)から始まり、プーシキン美術館展、ボリショイサーカス、ロシア・ソビエト映画祭など、多くのイベントが開催されています。プログラムの詳細は、ロシア文化フェスティバルのホームページでご確認ください。

⇒ <http://russian-festival.net/index.html>

本の紹介

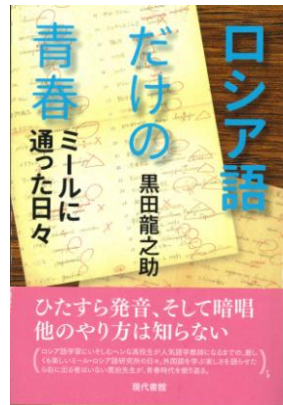
ロシア語だけの青春

～ミールに通った日々

著者:黒田 龍之助

発行:現代書館

定価:1500 円+税



ある晴れた日、ひとりの青年が私に一冊の本を差し出した。『ロシア語だけの青春～ミールに通った日々』、黒田龍之助著。そして「このやり方でレッスンしてください」と言う。

黒田龍之助、外国語好きなら知る人ぞ知る名前であろう。私も何冊か語学物エッセイを読んだことがある。それにしてもタイトル「ロシア語だけの青春」とはまた…….と思いつつ、まずは読んでみることにした。

最初の数ページの授業風景で引き込まれた。「何、この学校、聞いたことない！」この本によると、NHK 講座のテキストに広告が出ているとある。手元にあった 1990 年代の NHK テキストを引っ張り出す。これは私にとってロシア語の教科書第 1 号で記念にとっておいたものだ。表表紙裏という堂々たる場所に、つつましい広告が出されていた。うーん、まったく気づかなかった……。

ミール・ロシア語研究所では「音をつくるのが大切」ということで、発音指導・矯正を中心に授業が進められ、文法説明、解答のある練習問題等、自分でできることは学習者の自助努力に任せる、とのこと。授業に参加するにはひたすら暗唱のための努力が求められる。レッスンは少人数制、授業中は極力日本語を話さない。体育会系張りの厳しさとダメ出し。噂では「一夫先生は口に手を突っ込んででも発音矯正させる」こともあったらしい(ミールに通ったことのある友人談。彼女が通っていたことも、私はこの度初めて知った)。本書を通じて、授業中の緊張感が伝わってくる。

私はロシア語講師として一応の経験を積んできたつもりではあるが、これまで文法の説明を一生懸命してきたなあと思ふと考え込む。いや、文法だって大事だし、と軽く心の中で言い訳しつつも、「発音と暗唱」が大事というのは分かる。おそらく外国語を勉強するのが好きな人なら、直感で分かるのではないだろうか。私はカフェでロシア語の個人レッスンも行っているが、たいてい学習者が「これを暗記するので聞いてください」と自分で暗記用の題材を持参してくる。私自身をふり返ってみても、新しい外国語を始めるときには、まず

暗唱から始めたものだった。みんな、分かっているのだ。だが、それを体系的にやる学校があったなんて！

遠い学生の頃の自分を思い出して、想像の中でミールに通ってみる。暗い雑居ビルの中、前時代的で、夏は涼しそうだが、冬は暖房が効かなそうな教室、薄暗い廊下に何やらぶつぶつぶやく数人の人(すべて想像)。……正直、初めてミールを訪れたときにこんな感じであれば、この時点で引き返しそうな気がする(笑)。ひとまず、そこは乗り越えたいでしょう。教室の中も暗く、石油ストーブの匂い、やはりぶつぶつという生徒が席に着き、先生を待っている。廊下を通り抜け、教室に入れたなら、この雰囲気は好きかもしれない。そして、先生が登場、いきなりロシア語で時間を尋ねられ、端から順番に当てられ、緊張感に包まれながら例文暗唱、発音がまずければ「もう 1 回！」と怒号が飛ぶ……。怒号は飛んでないか？想像の中は、前時代的な喩えを許していただければもはや「巨人の星」あるいは「アタック No.1」の世界である。

私の大学時代は 90 年代なので、ミール・ロシア語研究所は健在であったはずだ。当時にミールの存在を知っていたなら、通うこともできたであろう。この学校の意義を正しく理解し、ロシア(またはロシア語)への情熱が溢れんばかりであれば、地方住まいであろうと私は通っていたかもしれない。しかし、想像の中でかつての自分に問うてみるも、そもそも体育会系のノリが苦手で、ロシア(語)への情熱もそれほどでなかった私は、はるばる東京まで出ていかなかったであろう。今でこそ、ロシア語への情熱も芽生え、体育会系のノリであれなんであれその意義が分かる今こそ——なのに、時すでに遅し。ロシア語を教える立場になり、ロシア語をゼロからやり直そうとまではさすがに思わないが、その教授法に直に触れてみたかった。それがもう叶わないのがとても悔しいが、出会いばかりはご縁とタイミングなので致し方ない。しかしながら、本書を通じてミールと知り合った。時空を超えるのが書物のいいところである。

本を読み終えて、件の青年のレッスンを引き受けることにした。音に重点を置き、大きな声で発音するのは、カフェレッスンには向いていないのだが、ひとまずやってみよう。ただ、レッスンを行うにあたり、直接の受講経験がないというのが正直心もとない。ミールの授業で順番に指名されるため、生徒が自分の番を予測するのをよろしくないと考えた著者が、自身の受けたことのある授業で体験した「カード方式」(これで当たる順番が分からなくなる)を採用したという。「教育法というのは、こうやって伝わっていく」(130 ページ)。まったく同感である。

本書は黒田氏の「青春本」として興味深く拝読した。次はぜひ「ミール教程本」なるものの出版を切望する。

松下則子(神戸市外国語大学非常勤講師)

ジェーアイシー旅行センターでは、この夏ユニークな旅行をいくつか行いました。一番特徴的で大変だったのは何と言っても FIFA ワールドカップ・ロシア大会をめぐる狂想曲ですが、これは別の機会に譲るとして、今回はバルト三国での合唱公演ツアー(7月)、シベリア出兵 100 年慰霊と墓参の旅(8月)をご紹介します。(編集部)



池辺晋一郎指揮「悪魔の飽食」合唱団バルト公演 バルトの空に響く平和の歌声 200名の合唱団がコンサート

旧日本軍の戦争犯罪をあばき過去の反省に立って未来の平和を呼びかける「悪魔の飽食」合唱団(池辺晋一郎団長ほか 230 名)がバルト三国を訪れ、エストニアのタリンとリトアニアのビリニュスでコンサートを開きました。2013 年のロシア公演(モスクワ、ペテルブルグ)、2015 年の中国公演(ハルビン)のお手伝いをさせていただいた縁で、JIC は今回のバルト公演でも旅行手配とともにコンサートの準備・運営などでも協力させていただきました。

7 月 20 日と 21 日に福岡、関西、中部、成田の各空港から 6 つのグループに分かれてバルトに飛んだ合唱団は、7 月 23 日(タリン)と 7 月 27 日(ビリニュス)にコンサートを開き、またそれぞれ世界文化遺産に登録されているタリン、リガ、ビリニュスの旧市街などの観光も楽しみました。

コンサートは、「ふるさと」「大地讃頌」など日本の歌の合唱(指揮:浅井敬壹・全日本合唱連盟名誉会長)、神戸の太鼓集団「輪田鼓」(田中嘉治代表)による和太鼓の演奏、そして池辺晋一郎さん指揮の混声合唱組曲「悪魔の飽食」の 3 部構成で、歌詞はエストニア語、リトアニア語に翻訳されて演奏と同時に字幕上映されました。タリンでもビリニュスでもほぼ満席の観客が集まり、合唱団の平和のメッセージにスタンディングオベーションで応えました。

また、合唱団はタリン郊外のクローガ強制収容所跡を訪れ

て、第二次大戦でのユダヤ人犠牲者の慰霊碑に参拝し、現地ユダヤ人協会の代表と交流集会を行いました。さらに、リトアニアではカウナスの杉原千畝記念館を訪問、「命のビザ」によって 6000 名のユダヤ人を救った日本人外交官・杉原千畝の偉業に触れるとともに、記念館の館長さんたちと昼食交流会を行いました(「命のビザ」とカウナスの杉原千畝記念館については JIC インフォメーション 197 号をご参照ください)。

200 人を超える旅行手配には大人数なりの困難があり、旅行中も小さなトラブルはいろいろありましたが、参加者の皆さんが何よりもコンサートで力いっぱい歌声を響かせることができたことと喜んでくださり、また公演ツアーを楽しんでくださったことは、手配旅行社としても嬉しい限りです。



観衆の大拍手に応える池辺晋一郎さんと合唱団員



和太鼓の迫力ある演奏が観客を魅了



コンサート後、観客を笑顔で見送る合唱団員の皆さん

シベリア出兵とシベリア抑留 墓参と交流の旅

横山周導師ら墓参団が イワノフカ村で合同慰霊祭

8 月 21 日から 28 日まで、岐阜のロシアとの友好親善を進める会（理事長：横山周導師／真宗大谷派・善正寺住職）の一行 34 名が、ロシア極東のハバロフスク市とアムール州を訪れ、100 年前のシベリア出兵（干渉戦争）によるロシア人犠牲者の慰霊と、第二次大戦での日本人抑留者の墓参の旅を行いました。

一行は、ハバロフスク市内の日本人墓地をはじめ、アムール州の州都ブラゴヴェシチェンスク市および州内の日本人抑留者墓地（ラズドリノエ村、タンボフ村、ノヴォアレクサンドロフカ村、スヴァボードヌイ市、ブラゴルスク市、さらにハバロフスク郊外のホール市など）10 か所以上を訪れ、シベリア抑留中に死没した日本人捕虜の墓参と慰霊を行いました。同時に、100 年前のシベリア出兵で日本軍の焼き討ちにより 300 名近くが虐殺されたアムール州イワノフカ村に建立された「日露合同慰霊碑」の前で、共同慰霊祭を行いました。

訪問団には横山周導師をはじめ浄土真宗の僧侶 3 名、ま

た真言宗の僧侶 3 名が同行し、それぞれの墓地で毎回臨時の祭壇を設けて供養の花を手向け、代表者が交代で慰霊の言葉を述べ、僧侶の読経が続く中で参加者全員が焼香するというまさに墓参の旅でした。焼香には時としてロシア人参加者も加わり、またイワノフカ村では日本仏教の僧侶とロシア正教の聖職者が手を携えて慰霊祭を行う姿は、まさに宗教政派を超えた心のつながりを感じさせるものでした。しかも、これらの墓地は地元の人たちの手で清掃され管理されており、日本から訪れた墓参団を囲んで各地で関係者が歓迎交流会を開いてくれました。横山さんがこの 20 年間毎年行ってきた慰霊の旅が、単なる墓参ツアーではなく「日ロ交流の旅」と呼ばれる所以です。

今回の墓参団には、シベリア抑留研究の第一人者である富田武・成蹊大学名誉教授、満州に取り残されシベリアに抑留された女性たちに焦点を当てた研究で注目される生田美智子・大阪大学名誉教授などが加わりました。またイワノフカ村の慰霊祭には、日露合同慰霊碑を故斎藤六郎氏（全抑協会会長）とともに建立したロシア側立役者である東洋学研究所のエレーナ・カタソワさんもはるばるモスクワから駆けつけるなど、学术交流の面でも意義深いものがありました。以下、今回のシベリア墓参と交流の旅に参加された富田武・成蹊大学名誉教授に「アムール州の日本人捕虜とイワノフカ村」と題して寄稿していただきました。（編集部）



イワノフカ村日露合同慰霊祭(8 月 24 日)



アムール州の日本人捕虜とイワノフカ村

富田 武（シベリア抑留研究会代表世話人）

アムール州の日本人捕虜については、ロシア語でもまとまった本はない（今回ブラゴヴェシチェンスクで探してみたが）。なぜかという、同州は 1948 年 8 月までハバロフスク地方の一州であり、分離した頃には日本人捕虜がいなくなっていたからである。かの『捕虜体験記』でも、ハバロフスク地方とは別巻だが、回想記がライチハ地区（収容所のまとまり＝分所の集合体としては第 19 収容所）とブラゴヴェシチェンスク（日本人はそう発音したが、正しくはブラゴヴェシチェンスク。同じく第 20 収容所）地区に分けて配列されている。

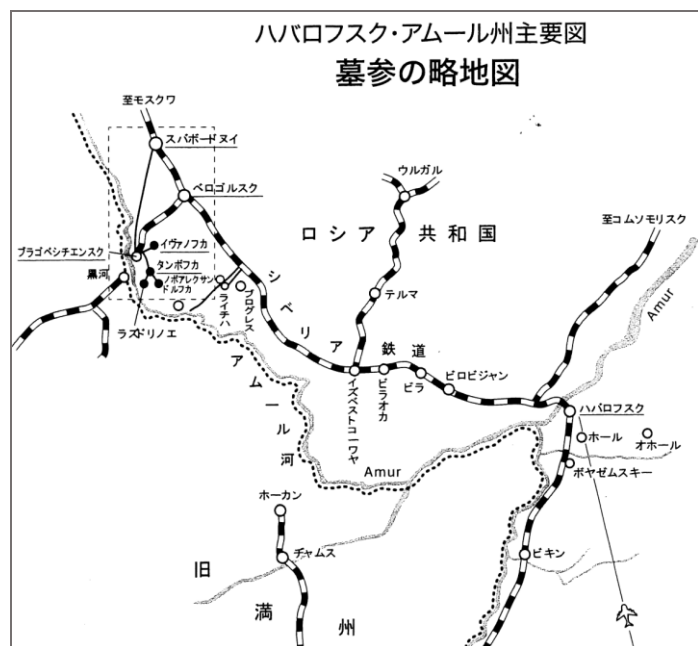
アムール州は大雑把にはシベリア鉄道本線の沿線にあるが、州都ブラゴヴェシチェンスクはペロゴルスク（当時はクイブリシェフカ）から南西に延びる支線の終点である。アムール河（黒竜江）に支流のゼーヤ河が合流する港町で、対岸は中国の黒河（ヘイホー）である。新京、奉天、吉林、孫呉などでソ連第二極東方面軍に捕縛された日本軍将兵が入ソした最初の街だった。ライチハ（都市としてはライヒチンスク）も、本線のプレーヤから西方に延びる支線の終点である。

池辺貞喜(画家)はブラゴヴェシチェンスクを通過して、北方ムヒノの分所に移送されるが、ブラゴエの印象を記している(私家版「シベリア抑留断片」)。日本人捕虜がもの珍しく集まってきた子供たちの姿で、「粗末な垢だらけの服を着て、その殆どが裸足だった」のを見て、これが戦勝国かと驚いたという。このような観察は、他の地域でも頻繁に記録された。

ブラゴヴェシチェンスクの 35 km 南南東にラズドリノエ村がある。ここには第 5 分所があり、捕虜が 500 人収容されていた。横山周導師の慰霊墓参団と交流する同村博物館が、子供達のサークルによる古老からの聴き取りを収録した「戦争期のわが村域における日本人」(露文、富田邦訳)が興味深い。7 人(うち女性 3 人)の当時 10 歳前後だった村民が覚えている日本人捕虜の様子が描かれている。

箇条書式的に記すと、①彼らは野菜保管庫に住まわされたが、自分たちで浴槽を作るなど工夫をした。有刺鉄線はあったが警備は緩やかで、村を歩き回ることもできた。②主な仕事は、村が農業・酪農地帯のため牛の放牧や干し草集めだった。食事は粗末だったが、パンはソフホーズ(国営農場)から提供され、食糧不足の村民が好意で牛乳やスメタナを振舞うこともあった。③捕虜側も、軍医が村民の治療に当たり、薬品を与えた。一般にソ連国民は捕虜と交わることは禁止されていたが、少しずつ接触が広がっていった。④捕虜の何人かは片言のロシア語を話すようになり、日本語の歌のほか「カチューシャ」をロシア語で歌う者もいた。⑤総じて、村民は日本人の勤勉ぶりや清潔さを評価し、中には欧州部でドイツ軍の占領を経験し、戦争の悲惨さを身をもって知るがゆえに、日本人捕虜に同情する者もいた。⑥この第5分所では全員が生き延び、付近の第3分所では死者が出たが、その違いは同じ農業でも前者は酪農で、捕虜も乳製品にありつけたからだと思われる。

ラズドリノエ村の真東 30 km(ブラゴヴェシチェンスク南東 60 km)にノヴォ・アレクサンドロフカ(NA)村がある。ここには第 13 分所があったが、その捕虜たちは帰国後「ブリヤン(雑草)会」を作り、うち新京経理学校出身者は「緑園会」という同窓会にも属していた。私はまず 2012 年に双方に属する大岡明男、ついで成富満と知り合い、2015 年には二人を含む「緑園会」メンバー 4 人と会食した。大岡によれば、第 13 分所の捕虜(総勢 500 人)は主としてソフホーズでジャガイモ掘りをさせられた。成富ら 65 人はタンボフカに回されて農作業に従事し、その過程で階級章を外した。成富は仲間とともに NA 村に戻ったが、肋膜炎でブラゴヴェシチェンスクの病院に入院、反軍闘争を経験した。その後クイブィシェフ



(ロシアとの友好親善を進める会会報より)

まずブラゴヴェシチェンスクについて。『捕虜体験記』VIで編者の高橋大造が「市街地での体験記の寄稿の少ないのはなぜだろうか」と書いているように、回想記には収録されていない。私の手元には、夏梅誠一『“棄民”のあしあと』(かもがわ出版、2015年)くらいしかない。

夏梅は孫呉で捕虜になり、そこで編成された作業大隊(1000人)の一員として黒河まで3日半歩き続けてから舩に
乗せられてブラゴヴェシチェンスクに到着した。収容された
のは煉瓦づくりの大きな建物で、帝政ロシアの軍人か土地
の顔役のものだったのが、ロシア革命直後に赤軍兵士か、
シベリア出兵時に日本軍隊が破壊したのではないかと想像
をめぐらした。労働は波止場での荷役作業で、60 kgの大豆
入り麻袋をかつがされる重労働が毎日続いた。冬が近づく
と外套、帽子、手袋、靴が支給された。アムール河が凍結す
ると、氷上にレールが敷かれ、鉄道が走ったのには驚かさ
れた。その貨車への積荷作業がきつく、穀物なら失敬する
余得もあったが、それも失われた。

収容所は不潔なため、蚤、虱、ダニの巣窟となり、伝染病に倒れる者が続出した。労役に従事する者が減り、代わりに凍った糞のピラミッド崩し、死体の運搬と埋葬という嫌な使役

力で重労働をさせられ、その結果第 888 特別病院に入院、そこから 1948 年 5 月に帰国した。

NA 村の墓地には「ブリヤン会」は 1991 年夏、95 年夏にお参りしたが、墓碑 5 基は 91 年春に村人が建て、周りを柵で囲ってくれたもの。95 年夏の墓参の折に真ん中に「日本人鎮魂の碑」を取り付け、翌年夏に成富子息が「ゴルバチョフ死亡者名簿」記載の 16 人の名を記したプレートを持参し、村に取り付けてもらった。それが何者かに持ち去られたので (90 年代のロシア経済混乱期に各地の墓地であった)、村が 2015 年に再取り付けを申し出、16 年墓参の折には新墓誌が見られた。これを「村山常雄死亡者名簿」で可能な限り漢字に変え、階級と死亡日を示したのが別表である (うち竹内悌三は、1936 年ベルリン・オリンピックの日本代表サッカー・チームのメンバーだった)。

私は大岡、成富の二人から「戦友によろしく」と言われ、墓地では「追悼の言葉」を読み、8 月 10 日に大岡が亡くなったことも報告した (享年 98 歳)。



ノヴォ・アレクサンドロフカ村にて、説明する富田教授

クイブィシェフカとミハイロ・チェスノコフスカヤ

クイブィシェフカは、先述のようにブラゴヴェシチェンスク行き支線の始点である。ここには、第 510 労働大隊 (通常の捕虜収容所が内務省管轄であるのに対し、国防省ここではザバイカル・アムール軍管区が管轄) (1947 年 3 月 1 日現在 697 人) と第 888 特別病院 (収容所の診療室では扱えない重症患者を収容) (1946 年 6 月 1 日現在 667 人) があつた。宮崎久 (新京経理学校出身) は NA 村の第 13 分所で肋膜炎にかかり、おそらく成富と同じ病院で治療を受け、1 ヶ月後には元気になって入退院患者の世話をした。

宮崎はクイブィシェフカの収容所、つまり上記第 510 労働大隊の主計将校 (見習士官) に転属した。収容所の人員は 1000 人くらい (その後減少)、朝鮮籍の捕虜も 200 人ほどいて、独立の朝鮮人中隊を構成していた。作業では接触がなかったが、食事は一緒だったという。日本軍の朝鮮人将兵は、満洲で捕縛時に名乗り出れば釈放されたが、日本名で残ったものについては労働大隊の運営上まとめた方が管理

ノヴォ・アレクサンドロフカ村墓地の墓碑

墓碑記載	村山名簿記載			
氏 名	生没年	漢字名	階級	死亡月日
アシダ・カズオ	1925-1946	芦田 和夫	兵	4 月 11 日
イトー・セイイチ	1908-1946	伊藤 清一	兵	7 月 3 日
オガタ・アキオ	1925-1946	(該当者なし)		
キタジマ・ミツマサ	1924-1945	(該当者なし)		
カワノ・エツミ	1925-1945*	(漢字不明)	上等兵	10 月 17 日
クボタ・リョーヘイ	1923-1945	久保田 良平	兵	11 月 9 日
クリハラ・カズオ	1925-1945	(漢字不明)	兵	11 月 9 日
スギヤマ・アツシ	1923-1946	杉山 厚	少尉	4 月 6 日
スズキ・トシオ	1917-1946	(該当者なし)		
シマダ・マサオ	1926-1946	(漢字不明)	兵	5 月 14 日
タケウチ・テイゾー	1908-1946	竹内 悌三	上等兵	4 月 12 日
ナカザワ・タツシ	1925-1945	(該当者なし)		
フジカワ・ナミュキ	1925-1946	藤川 並之	少尉	11 月 4 日
ムラマツ・アキラ	1925-1946	村松 明	兵	11 月 26 日
ヤマザキ・リョーゾー	1920-1946	山崎 亮三	上等兵	4 月 8 日
ワタナベ・サトル	1925-1945	渡辺 悟	兵	11 月 12 日

*1947 と誤記

しやすいので、独自の中隊を編成したものと推測される。主計将校の職務柄知り得たことに相違ない。

労働は道路掃除、貨車からの石炭おろし、パン工場の雑役、煉瓦づくりなどで、比較的楽だった。1946 年早々『日本新聞』が配られ、階級廃止運動が起きた。まもなく階級章は廃止され、将校の当番兵も廃止された。ソ連側は将校食と将校室での起居は従来通り続けさせた。復員は 1947 年 1 月、つまり日本人送還に関する米ソ協定締結直後で、本人は「幸運中の幸運」だと記している (以上「私の抑留記抄」『捕虜体験記』VI)。

スヴァボドヌイ市郊外のミハイロ・チェスノコフスカヤ村には、第 9 分所があつた。『捕虜体験記』には同じ孫呉の部隊の堤憲蔵と遊佐陸男が書き、別部隊の小野寺林が「ミハイロ絵日記」を書いている。堤と遊佐はブラゴヴェシチェンスクから列車でシマノフカまで行き、1 週間ほどコルホーズで馬鈴薯掘りをしてから、再び乗車してミハイロ・チェスノコフスカヤ駅で下車した。収容所は、元は囚人収容所、つい先ごろまではドイツ人捕虜が収容されていた。労働は、ゼーヤ河河畔に位置した製材工場で、線路の枕木を作るものだった。時に穀物倉庫での運搬作業があり、穀物をくすねては食した。

堤は 1946 年 7 月のある日熱湯を被って火傷し、クイブィシェフカの第 888 病院に入院した。食事は白パンにスープというご馳走で、やがて元気になり、ロシア語を学び、民主グループに入って政治教育を受けた。「新生劇団」に入り、稽古を重ねて患者慰問演芸会をやったが、そこには病院職員のロシア人も来て喜ばれた。病院生活 1 年 4 カ月ののち製材工場に戻った。遊佐の方は同じ製材工場で働き、製粉工場にも行って穀物をくすねる点は同じだった。こちらはアメーバー赤痢にかかって収容所の医務室に入室した。二人とも 1948 年 5 月にダモイを告げられ、故国に向けて出発した。

スヴァボドヌィ市の博物館では、一行の一人が第 9 分所の死者名簿(136 人)の写真を撮らせてもらったが、一部写りが悪く、ゴルバチョフ名簿『月刊 Asahi』1991 年 7 月掲載)と照合中である。むろん姓名はカタカナ表記なので、村山名簿とも照合している。

スヴァボドヌィ駅より北のシマノフカ(第 2 分所)、ペトルシー(第 523 労働大隊)、ムヒノ(第 12 分所)は今回訪ねてはいないが、そのいずれかと思われる分所または労働大隊収容所での労働と生活を、田村助次という民間人(満洲嫩江県職員)が『捕虜体験記』に書いている。極寒期の埋葬、棺桶づくりと死体の納棺の話が痛々しい。もう一つは夏の草刈り作業の引率者マーリンケ(「小さい人」の綽名とあるのでマーレンキー)少尉につき、「独ソ戦のときドイツ軍の捕虜となつて、長い間私たちと同じ運命下に身をさらしていた経験があると自分で言っていた。だから、私たちに対しても陰に陽に味方となり、ありがたい存在だった」と記している。捕虜になった者は敵と通じていたと疑われ、帰国しても僻地の日本人捕虜収容所の仕事に左遷されたのである。このような観察と叙述は『捕虜体験記』に頻繁に見られる。

冒頭、アムール州はハバロフスク地方から分離したときには、もはや日本人捕虜はいなくなつたと書いたが(正確には、ブラゴヴェシチェンスク収容所は 1948 年 10 月、ライチハ収容所は 1949 年 1 月まで存続)、それでは誰が後を引き継いで強制労働に服したのかという疑問が生ずるであろう。実はソ連は戦後、ドイツ軍の捕虜になったことのある自国民帰還兵、領土に併合した(再併合した)ポーランド、バルト三国等における「反ソ分子」、あるいは農業集団化に抵抗した農民をシベリア、極東に大量に強制移住させ、ドイツ人、日本人等の捕虜の帰国後の穴埋めをしていたのである。例えば、アムール州に送り込まれたウラーソフ軍(同中將に率いられてドイツ側で戦った「ロシア解放軍」)兵士は、1949 年 1 月時点で 3185 人(ソ連極東全体では 39137 人)もいた。また、ラトヴィアからアムール州に強制移住させられた人々は 1949 年で 2028 家族、5451 人を数え、そのかなりの部分が最初はスヴァボドヌィ市に住まわされて木材積み替え作業に従事し、まもなくゼーヤ河上流の森林伐採区に汽船で移

送されたという(E・N・チェルノルーツカヤ『ソ連極東における強制移住、1920-1950 年代』露文、ウラジオストク、2011 年)。

イワノフカ村虐殺＝「共匪」掃討の原点

1919 年 3 月 22 日、日本軍在ブラゴヴェシチェンスク市歩兵第 12 旅団(山田四郎少将)傘下の坂井支隊が「パルチザン討伐」を名目に同市東北東 30 km のイワノフカ村を襲撃、村民 36 人を焼き殺したほか他村民、中国人を含めて合計 257 人を殺害した。その様子は一行に配布された原暉之の小文、同村博物館での展示で明らかなので、ここでは同事件及びシベリア出兵がその後の歴史に与えた影響に言及したい。

第一に、日本軍は「共匪」、すなわち共産主義者(もしくは同調者と見なされた者)に率いられたパルチザン(正規軍ではない義勇兵からなる遊撃隊)を恐れた。「満州事変」でも「日中戦争」でも、その掃討を重視し、中国では「三光作戦」(奪い尽くし、焼き尽くし、殺し尽くす)を実施するに至った。その原点はシベリア出兵、とくにイワノフカ村事件にあった。

第二に、日本がシベリア出兵の進展、侵攻地域の拡大に伴って各地に設けたのが、ハルビンをはじめとする特務機関(敵の、とくに後方の情報を収集するために設けられた情報機関)であった。それはシベリア撤兵後いったん縮小されたが、日本陸軍は戦略的には「北進」＝対ソ戦争の立場をとっていたから、満洲事変後は拡大し、スパイを放って情報を獲得して対ソ戦争に備え、局部的には実際に戦争を行なった(張鼓峰事件、ノモンハン事件)。

第三に、白系(ソヴィエト政権に反対する)ロシア人の利用も、シベリア出兵に始まり、とくに満洲事変以降は盛んに行われたが(白系露人事務局)、結局は彼らの離反を招き、日ソ開戦前に相当数が密かにソ連支持に回っていて(上記事務局内でさえ)、開戦後に日本側を驚かせた。

ちなみに、シベリア出兵とシベリア抑留を二つとも経験したのは、職業軍人の一部だが、私の母方の大伯父(1892-1959 年)は、1919 年から 1 年間ニコリスク(沿海地方ウオロシーロフ)で小隊長、中隊長代理を務め、日ソ戦争時に朝鮮北部の凶們で連隊長として捕縛され、タンボフ州ラーダ、ついでタートル自治共和国エラブガの収容所で抑留生活を 3 年間送った。

私が今回の慰霊墓参団に加わったのは、出兵 100 年に当たってイワノフカ村に行きたかったからである。



【ちょっと変わった留学記】～その 2; エピソード編

まるで公園の中の町・ミンスク

鎌田 幸伸(ロシア語通訳案内士／奈良県在住)

前号に引き続き鎌田さんのベラルーシ留学記をお届けします。今回からは「ロシア語特訓」を離れて、留学中のエピソード集です。「ミンスクの第一印象」、「スヴィスローチ川のほとり」、「秘密の図書館」、留学生活では思わぬ発見に出会うことがあるようです。(写真は鎌田さんが留学したミンスク言語大学)

ミンスクの第一印象

「空がまるで広い」ーそれがミンスクの第一印象である。.....この都市には山がない。四方八方見渡しても山がない。サンクトペテルブルグも山はなかった。フィンランドも山がなかった。10 年以上前ロシアにいたときは「日本なら当たり前にあるはずの山がない」ことに寂寥を感じたが、今回は違う。山がなく、柔らかな隆起を繰り返す都市にユーモアのようなものを感じる。「そんなカッコつけるようなものは何もありませんが、それでも案外住みやすくていいところなのです」みたいな。

聞くとところによると、ミンスクに留学する学生は 2 つに分かれるらしい。すっかりこの国が気に入ってほれ込んでしまう学生と、こんな退屈な街には耐えられないとさっさと帰国したがる学生と。多分、この都市の空が広いと感じる人は時間の許すかぎりこの国に留まりたくなるだろう。何も感じない人は娯楽施設(アミューズメントパーク)の乏しいこの街に嫌気がさして早く帰国したくなるのかもしれない。

ロシアのサンクトペテルブルグは都市全体が美術館のように見える。しかし表通りから一歩裏通りに入ると、清潔感はない。ゴミや動物の糞が落ちていたりする。クルマは信号が赤でも、“横断歩道を人が歩いている”と見るや突っ込んでくる。ミンスクは対照的である。この街は全体的に清潔感がある。都市のあちこちに大きな公園があるがゴミはほとんど落ちていない。似たような形と大きさのアパートが林立しているけれども、建物の前は幅の広い歩道が整備されていて、人はゆったりと歩き、家族で散歩し、サイクリングを楽しんでいる。アパートの周囲には木がたくさん植えられていて、「森の中にアパートが建っている」ような印象を受ける。天気の良い日はベンチに人が集って会話を楽しむ。

街や公園が清潔なのは、毎朝、大勢の人が掃除しているからである。早朝に目覚めて外に出たとき、黄色の上着を被った人が大勢で歩道の石垣に生える草を刈っているのを見た。公園も定期的にゴミを拾っている。けれども、地元の人は誰も「ミンスクは美しい街」と自慢しない。

スヴィスローチ川のほとり

ミンスク市街地図の中央はスヴィスローチ川である。最初見たとき「湖かな」と思った。大きな湖や公園を歩くのが大好きな私は、ミンスクに来て最初の土曜日、朝から地図を片手に出かけた。巨大な公園に一番近い地下鉄駅はニューミガ駅である。そこで降りて「湖に行きたいのですが...」と通りすがりの人に聞くと、「湖？ 川でしょう。」と直して教えてくれた。地図をよく見ると確かに川だ。水の青色が地面で囲まれていず、地図の右下から左上までず～っと続いている。川のほとりすべてが公園ではないが、間隔を置いて公園が整備されている。

川の中心部はコムソモールスコエ湖と呼ばれる。ほとりの公園はとても雰囲気がいい。空の青と川の青、公園の木々の緑がとけあうように見える。日本人にとって「きれいな外国の街」というと、パリ、ロンドン、ニューヨーク、イタリアの街...と欧米の国を思いつくけれど、ここを歩いていると「ミンスクは観光名所の最後の“穴場”」と思った。

河岸全体に遊歩道とサイクリング用の道が整備されていて、散歩を楽しんでいる人、サイクリングやローラースケートを楽しんでいる人、ベンチに座ってくつろいでいる人もいる。幹線道路から公園にかけてスロープが一定の距離で整備され、乳母車を押してくる若い夫婦がいる。道路から川まで芝生がきれいに整備され、木々も植えられていて、シートをひいて寝転んでいる人もいれば、座って本を読んだり、会話を楽しんでいる人もいる。川ではボートを借りて楽しめる。公園の所々にファーストフードのスタンドがあり、軽食をとったりビールを飲んだりもできる。

川の中央部分に橋が架かっていて、それを渡ると「離れ小島の森」に行ける。ここが「首都の中心」と思えないほどの静けさである。「時間があれば、毎日この公園を歩いてもいいなあ...」と私は思った。

けれどもこの公園はただ“きれい”なだけではない。湖から少し下流の北岸に丘があり、アフガン戦争で戦死した兵士たちの慰霊碑がある。かつてベラルーシがソ連の一部だった時代、多くの若者がアフガニスタンで命を落とした。結婚

式を挙げた新婚夫婦はまずこの慰霊碑を訪れて祈りを捧げ、自分たちの幸福を報告すると聞く。湖から少し北には国立戦争博物館がある。この巨大な 4 階建て博物館のすべての展示物は、本物の銃や戦闘用ジープ、戦車、戦闘機、爆撃機などで、見るとある種の戦慄に駆られずにはいられない。

この湖一帯は戦時中焼け野原で、文字通り“瓦礫の山”を整備して、現在の美しい公園の景観が戦後人工的につくられた。日本ではまず知られていないが、ほとりの南側には「ヨーロッパ最大」といわれたユダヤ人ゲットーがあった。ドイツ軍に強制収容所に入れられたユダヤ人はほとんど生きてそこから出られなかった。この川のほとりの“息を呑むような”美しさ、平和な風景は、戦争の悲劇の影と表裏一体なのだ。

秘密の図書室

ミンスク言語大学にも図書室はある。だが、ここの図書室は「学生や教員が読みたい本を置いて管理する施設」であって、日本の大学のように学生が勉強する場所ではないようだ。本を読んだり、調べものをして作文したりするには、寮に帰るかどこかのカフェに行くかしかない。

しかしこの学生寮がまた曲者だった。私がいたのは言語大学の学生専用寮である。が、どういうわけか私の部屋には子どもの泣き声が昼夜を問わず聞こえてきた。「学生寮にどうして小さな子どもが住んでいるのか?」。ここは外国で日本の常識は通じない。然るべき事情があってこの学生寮にはいろんな人が住んでいるわけである。大学教員の先生も住んでいた。

(けど、これってひどくない?)と思った。集中して本を読んだり、原稿や作文を書くには静けさが必要なのである。しかも私は小さな子どもの泣き声が人一倍ニガテであった。けれども、小さな子どもがストレスを訴えるには思い切り泣くしかない。「静かにしてください」と頼むほうが無理なのである。とりえず私は寮の生活指導員さんに相談しに行くことにした。

私はペトロフシナという地下鉄駅の近くにある学生村の寮に住んでいた。この学生村はルカシェンコ大統領の肝入りでつくられた居住区域で、15 階建の学生寮が 8 棟ほど建っていた。それらの寮にはミンスク中の大学の学生が、大学と学部ごとに分けられて住んでいた。芸術大学の寮もあって、中からピアノだのバイオリンだの、いろんな楽器の音が聞こえてくることもある。この学生村の寮がユニークなのは、いい意味で「この国の将来を担う人材を育てよう」という配慮が随所に見られることだ。各寮には階ごとに生活指導員が 2 人ほどいて、学生の生活ぶりをチェックし、また相談にも乗るようになっていた。私がかつて過ごした日本の大学の学生寮は学生運動家の牙城で、宴会も同棲もやりたい放題の“無

頼の徒の巣窟”だったが。

「この部屋は汚いですね、掃除してください」と私の住んでいるブロックに時折現れて指導をするよく肥えた指導員のオバサンは、その日風邪で休みらしかった。仕方なく寮の管理室を訪れて、その部屋のオバサンたちに窮状を訴えた。

「あの...、この寮には静かに勉強するための図書室はありませんか?」

オーリガという名の天然パーマのオバサンは黙って話を聞いていたが、「わかったわ。5 分したらもう一度来てください。」と言った。5 分後に行くと、数枚の書類にサインを指示され、カギを渡された。

「あんたの部屋の近くにある図書室のカギよ。ここで好きなだけ勉強してね。ただしこれはアタシのカギなんだから、失くさないでね。」(この寮は 15 階建だが、どの階の隅にも大きな広間の部屋があった。もちろんカギがかかっている寮の管理人以外は開けられない)。

いきなり小学校の教室三つ分くらいの空間が自分の自由になってしまった。が、とにかく静かに集中して勉強できるのはいいことだ。今日はなんて幸運なのだろう...と思って好きなように本を読み、原稿を書き、音読し、書いた作文を暗記した。

オーリガさんは夕方 5 時になると勤務を終えて帰ってしまう。だから夜 11 時頃に寮の玄関の警備員に「明日、オーリガさんに返してください。」とカギを渡しておいた。そういう約束と私は思ったのである。

次の日大学から帰って、「また図書室を使わせてもらいたいな」と彼女のところへ行行って「カギを貸してほしい」と頼むと、「へえ? アンタ、昨日の私のカギどこへやったの?」と言う。「玄関の警備員に返しました」と告げると、「それやダメだ!」と私を連れてすぐに警備員室に行きカギを返してもらった。

「このカギはアタシがアンタに貸したのよ。この図書室は好きに使っていいわ。」

「へえ...。夜も勉強してもいいんですか?」

「夜? 夜は寝るものよ。じゃあ好きなだけ勉強しなさいね。」

というわけで、この教室三つ分のただっ広い広間は「私の書斎」になり、帰国するまで私は好きなようにここで本を読み、音読し、原稿を書くことができた。カギを預けられて自由にこの部屋を出入りし、勉強する学生は私の他にいなかった。

ベラルーシとロシアは違う。けれども文化や習慣はロシアに近い。この国に住んでいると、日本の「秒を競うようなサービス」は期待すべくもないが、日本の常識では考えられない器の大きさ、情の厚さに出会うことがある。

私は不思議な幸運に恵まれたのだった。(つづく)

《旅行記》ソロヴェツキー諸島

人を変えてしまう島

【最終回】 ソロベツキー修道院と消えない過去の影たち

モロゾフ デニス (JIC 東京)

ソロベツキー諸島滞在の最終日も天候に恵まれず、どんよりとした灰色の空が我々の上に重くのしかかっていた。

この日の午前中は島の象徴的存在であるソロベツキー修道院を見学することになっていた。ホテルから徒歩 10 分ほど歩いたところにある修道院の正門前で女性ガイドと合流し、レクチャーを受ける。



今日も太陽の出番はなし

ソロベツキー諸島で出会ったロシアのガイドさんたちはみなとても優秀で、話は深く面白い。話し方、表情、立ち居振る舞いなど、日本でガイドとして働く機会が多い自分にとっては非常に勉強になる。

ソロベツキー修道院の歴史についてはここでは敢えて触れない。知りたい人はネットで探せば詳細な資料がたくさんある。ガイドさんの説明で、個人的には 14 世紀から変わらず残っている城壁の一部が一番記憶に残った。昔の島民がレンガの強度を高めるためにウオッカと卵を土に混ぜ合わせてレンガを作ったという話が面白かった。それに城壁の上にそびえる巨大な櫓というか塔。2 段から 4 段まで構成されていて、当時の建築技術に感服してしまう。修道士たちが住んでいた僧房も一見の価値ありだ。修行目的で作られた居間が、時代と共に質素なものから快適な空間へと変わっていく様子が見て取れる。修道院の牢獄は恐ろしく、特にソ連時代 (1930 年代) にここで行われた拷問の話は耳を疑うほど残酷なものだった。



内側から見た修道院の城壁



改修中のソロベツキー修道院

修道院の歴史だけでなく、島全体の歴史についての展示物が多く、特に興味深かったのは人の手で掘られたダム of の仕組み。島民たちの想像を絶する努力のおかげで飲み水はこの島で絶えることなく常に飲めるようになったようだ。

しかし、修道院は現在修復中で、あちらこちらに作業員がいて、工事なのか発掘作業なのかかわからないが、雑然とした雰囲気と騒音があたりに漂っていた。

一通り見学を終え、正門を出た僕は目いっぱいソロベツキーの空気を吸ってみた。陰気な湿気と何とも言えな

い哀愁の後味が消えない。ソロベツキーの空気は、他の世界遺産でよく味わうワクワク、ドキドキの空気ではない。ここの空気には偉大さはなかった。そう遠くない、忌まわしい過去の鼠色の影たちは、この空気にひっそりと潜んでいる。人の苦しみや死の影は確かにだいぶ薄れてはいるが、しかし消えてはいない。島中、どこへ行ってもこの影たちは確実に存在する。修道院の城壁にも、島民がいまだに住み続けている半壊の建物にも、道路とはとても呼べない泥んこ道の水たまりにも、過去の影たちはひそかに存在していた。

自分にとってのソロベツキー諸島は、そういう空気が漂う場所だった。



ソロフキの空港ビルですよ～

帰りの飛行機は大幅に遅れているという情報で、しばらくホテルのレストランでだらだらと時間をつぶしていた我々はようやく空港へ向かった。

島に上陸した初日はあまり気に留めなかったが、最終日に時間がたっぷりあったので改めて「空港ビル」のいろんな意味でのすごさを実感。奇抜な色に塗られた長屋のような木造建物は紛れもなく「空港ビル」だった。スーツケースを必ず載せるように指示された床置き重量計は 1950 年代の代物だった。おそらく 30 年後も現役で頑張っているであろう。スタッフのおばちゃんも 50 年代から変わらない不愛想な表情を浮かべていた。こちらでもきっとこの先も変わらないであろう。

「空港ビル」で厳重な検査を受け、建物の前のベンチに腰を下ろす。はるか遠く飛行機が強風に煽られながらこちらに向かって飛んで来る。着陸した飛行機に今度は我々が乗り込む。

30 分後、どんどん小さくなっていくソロベツキー諸島に機上から最後の一瞥を投げ、今までと少し違う自分がいることに気づく。(了)

2018 年ワールドカップのロシア

15000人のボランティアが「おもてなし」

W杯機にインフラ整備も進む

チスティーナ・イリーナ (JIC モスクワ)

サッカーは、世界で最も人気の高い大衆競技です。ファンの関心の強さは時に圧倒されるほどです。2018 年ワールドカップは、史上初めてロシアで開催されました。会場として選ばれたのは、ロシア 11 都市の 12 カ所のスタジアムでした。

スタジアムの一部は古く、FIFA の基準を満たしていなかったことから、開催に向けた準備は困難かつ資金的にも大変なものであることが判明しました。スタジアム 9 カ所を新たに建設し、残りの 3 カ所を改修しなければならなかったのです。

2018 年ワールドカップのそれぞれの開催都市とスタジアムの状態は、以下の通りです。

スタジアム「スパルタク」(モスクワ市)

収容人数: 4 万 5000 人

スタジアムが活用されるようになってから 3 年が経過しています。定礎式が行われたのは 2007 年 6 月 2 日。2014 年 9 月に開業しました。2018 年ワールドカップで建設に国・地方政府の予算が一切使われなかった唯一のスタジアムです。

スタジアム「ルジニキ」(モスクワ市)

収容人数: 8 万 1006 人

スタジアムの建設は 2017 年 6 月に完了しました。「ルジニキ」はその歴史的な外観を残しながらも、内側の様子はすっかり変わっています。1980 年モスクワオリンピックのメインスタジアムとして使われた陸上競技場でしたが、陸上トラックは撤去され、客席がピッチに近くなってとても観戦しやすいスタジアムです。

スタジアム「サントペテルブルグ」(ペテルブルグ市)

収容人数: 6 万 8134 人

クレストフスキー島 (十字架島) のスタジアムの建設は 2007 年夏に始まり、2016 年 12 月下旬に完了しました。ここを拠点にしているサッカークラブ「ゼニト」は今シーズン、すべてのホームゲームをこのスタジアムで行っています。

「エカテリンブルク・アリーナ」(エカテリンブルク市)

収容人数: 3 万 5696 人

1957 年にセントラル・スタジアムが建設される前は、この地に自転車競技場がありました。開業後、スタジア

ムはスピードスケートの世界で有名になりました。

1959 年に世界女子スピードスケート選手権大会が開催され、1964～1973 年の期間に世界最強スピードスケートチーム(ノルウェー、ソビエト連邦、フィンランド、スウェーデン)との間で多くの試合が行われました。2017 年の改修の後はサッカー専用スタジアムとして利用されています。

スタジアム「ニジニ・ノヴゴロド」(ニジニ・ノヴゴロド市)

収容人数:4 万 5000 人

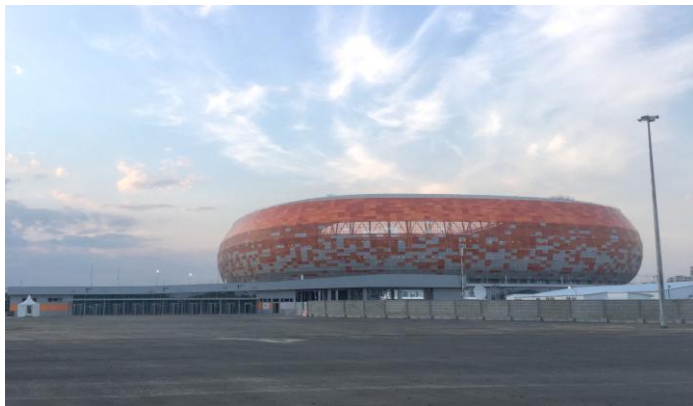
オカ川がボルガ川に合流する美しい場所に位置しています。以前、この場所には何もありませんでした。スタジアムの建設と並行して、インフラ(空港の新ターミナル、地下鉄駅「ストレルカ」)も整備されました。

「モルドヴィア・アリーナ」(サランスク市)

収容人数:4 万 4149 人

2018 年ワールドカップの開催都市が発表された際にサランスク市の名前が挙がったことは、多くの人にとって大きな驚きでした。

スタジアムのデザインはモルドヴィアの人々の神話や伝説のシンボルである太陽を表します。



サランスク市のモルドヴィア・アリーナ

「カザニ・アリーナ」(カザニ市)

収容人数:4 万 5379 人 *FIFA 大会では収容人数増加

スタジアムの建設は 2013 年夏に完了しました。開業以来今日まで、ユニバーシアード、世界水泳、FIFA ワールドカップ予選、ロシア・カップ、UEFA ヨーロッパリーグ、FIFA コンフェデレーションズカップが成功裏に開催されています。

2017 年 5 月中旬に開催されたロシア・プレミアリーグの地元サッカークラブ「ルビン」とモスクワ「CSKA」の試合では、初めて「ファン ID」による入場システムの試験が行われました。

「サマラ・アリーナ」(サマラ市)

収容人数:4 万 4807 人

サマラはロシア宇宙産業の中心地です。これにちなんでスタジアムのデザインは宇宙開発をテーマにしてい

ます。

ワールドカップの後は、サッカークラブ「クリリヤ・ソヴェトフ」の本拠地として利用されます

「ヴォルゴグラード・アリーナ」(ヴォルゴグラード市)

収容人数:4 万 5000 人

アリーナは歴史的なママイ墳丘墓(Мамаев Курган)のふもとに位置しています。ワールドカップ後には、スポーツ&レジャーセンターとなりました。

「ロストフ・アリーナ」(ロストフ・ナ・ドヌ市)

収容人数:4 万 5145 人

スタジアムはドン川左岸のボート競技用水路の近くに位置しています。観客はドン川の美しい風景を楽しむことができます。

スタジアム「フィシュト」(ソチ市)

収容人数:4 万 5000 人

2014 年ソチ冬季オリンピック・パラリンピックのために建設されたスタジアムです。オリンピック後に、ワールドカップ用に改築されて、収容人数がそれまでの 4 万人から 4 万 5000 人に増えました。出入場口も広くなり、数も増えました。観客席の座席はさらに快適になりました。

スタジアム「カリーニングラード」(カリーニングラード市)

収容人数:3 万 5212 人

ドイツ・ミュンヘンの有名な「アリアンツ・アリーナ」が建設コンセプトの基礎になっています。これまで建設地として使われたことのなかった自然豊かなオクチャブリスキー島(10 月島)に位置しています。

今回の FIFA ワールドカップで、ロシア政府は数多くの外国人サポーターを受け入れるために、最大限の対策をとりました。

開催都市の空港のうち 6 空港で、必要なインフラが整備されました。モスクワのブスコボ国際空港、ドモジェドボ国際空港のターミナルが改築されました。サポーターのスタジアムへの簡便なアクセスを確保するために、新しいバス路線が追加されました。多くのホテルが改修され、新しいホテルが建設されました。

ワールドカップでは、1 万 5000 人以上のボランティアが働きました。英語や他の外国語を知っている人が優先的に選ばれました。また、地下鉄の切符売り場の担当者は英語の講習を受けました。ワールドカップの開催中は、地下鉄に乗りながら、サッカー観戦することも可能でした。「ファン ID」による入場システムもうまくいきました。

この期間にロシアに来られた外国のお客様は楽しい時間を過ごすことができたと期待しています。

日本語教師募集！

キルギスの 11 年生学校「ピリムカナ・カント校」

キルギスで日本語教師をやってみませんか。
 ビンケク郊外にある 11 年制学校で、日本語教師を募集しています。やる気のある人であれば、年齢、性別、学歴を問いません。給料は少なく、往復航空券も自己負担とほぼボランティアの条件ですが、教師経験を積み、ロシア語もしくはキルギス語を学習するよい機会になります。

<条件>

受入校:ピリムカナ・カント校(私立の 11 年制学校)

所在地:ビンケク郊外(バスで約 30 分)のカント市

授業数:1 授業 40 分×1 日 3~5 授業×週 5 日

* 授業時間は双方の希望により増減

給 料:月額 150 ドル~200 ドル

宿 舎:ホームステイ(1 人部屋/無料)またはアパート

* アパートを希望する場合は自己負担。

特 典:希望によりロシア語またはキルギス語の授業が無料で提供されます(40 分授業×週 3~4 回)

募集人数:2~3 名

期間:19 年 9 月~20 年 6 月(希望により随時)

問合せ先:JIC 東京事務所 TEL:03-3355-7294

e-mail: jictokyo@jic-web.co.jp

<ピリムカナ・カント校の概要>

2013 年開設の新設校(11 年制学校)。

生徒数 520 人、教師数約 50 人。

日本語学習者約 460 人、日本語教師 4 人、日本語クラス=24 クラスで、1 年生~4 年生の生徒は全員日本語を選択しています。1 クラス=20 人~25 人。5 年生~11 年生には中国語選択の生徒もいて、1 クラス=15~20 人。

日本語教材:全クラス[まるごと日本の言葉と文化](国際交流基金オフィシャル日本語コースブック)を使用。

校舎は、カント校(1~4 年生)とリュクセンブルグ校(5~11 年生)の 2 カ所に分かれています。

◆◆編集後記◆◆

▼2018 年は「日本におけるロシア年」「ロシアにおける日本年」。各地で文化イベントが花盛りです。モスクワ夏祭り「F-FEST」の仕掛人・加瀬由希子さんに寄稿していただきました。▼また今年はシベリア出兵 100 年。干渉戦争によるロシア側犠牲者と第二次大戦後のシベリア抑留による日本人犠牲者の霊をともに弔う「慰霊と交流の旅」は NHK ニュースや共同通信の記事でも広く紹介されました。この旅に参加された富田武先生のレポートも読みごたえがあります。▼本紙への多くの皆さんの寄稿、投稿をお待ちしています。(F)

※※JICのロシア語留学・研修※※

29 年間の実績「だから、JIC のロシア語留学」

JIC ロシア語留学研修は、JIC 国際親善交流センターが日本で最初に旧ソ連・ロシアの諸大学と直接契約により開始した私費留学システムです。この 29 年間で JIC がロシアに送り出した留学生は長期・短期合わせて 3,500 名以上にのぼります。

安心の現地アフターケア

留学中はできる限り自分のことは自分でやっていただくのが語学力上達の道です。しかし、一人ではどうしても解決できない大学との交渉ごとや、緊急事態の際の連絡対応など、留学生の皆様をバックアップするために、JIC では各受入機関と緊密な連絡体制を整えています。

ロシア語長期留学19年4月生・募集開始



**締切は12月
早い目にお申込みを!**

期間:2019年4月1日より10ヶ月

締切:モスクワ、ペテルブルグ、シカ 19年1月16日

ウラジミール極東連邦大学18年12月21日

モスクワ国立大学 720,000 円(授業料 10 ヶ月)

サンクト・ペテルブルグ国立大学 786,000 円(授業料 10 ヶ月)

ウラジオストク極東連邦大学 316,000 円(授業料 10 ヶ月)

ミンスク言語大学 322,000 円(授業料 10 ヶ月)

※上記の金額以外に別途、寮費、手配料、渡航費用、ビザ代金および取得手数料などががかかります。

◆JIC ロシア留学デスク◆

ロシア留学・旅行のお問合せ・ご相談に応じます。

お気軽にお越しください。

東京事務所 平日 9:30~18:00 03-3355-7294

大阪デスク 平日 9:30~16:00 06-6944-2341

※留学相談は、必ず事前に予約した上でお願いします



10月~12月の予定

10 月上旬 JIC 東京 ロシア語講座 後期スタート!

JIC 大阪 ロシア語講座 後期スタート!

10 月 19 日~25 日 ロシア映画祭(東京)

11 月 17 日 JIC ロシアセミナー(黒田龍之助先生講演会)

ロシア留学説明会・相談会

最新情報は JIC のホームページに随時掲載いたします。その他のロシア情報も満載です。ご確認ください!